

# 原発災害 「復興」の影

■ 身を守る ④

早野龍五(62)は漏らす。

住民から「御用学者」

早野は自身がかかわるWBC検査や、ほかの医師や研究者が集めたデータから「事故当初の予想より内部

「御用学者」ともいわれる。

「不安を抱く住民に、データに基づいて被ばくは少ないと説明することは、東京電力の責任を軽くすることではない」と話し、被ばく

「事故当初の予想より内部の多寡の見解と、原発への

「グレーゾーンは黒」

二本松市で市民団体の代表を務める田口茂(63)は、

生活実態に基づいた被ばく量を個人線量計は測定できると強調した。国も今、避難解除区域で導入しようとしている。

「確かに(生活実態に即した)個人線量計は測定できることも引掛かった。」

は、屋外に8時

## 信頼されない「安全」

### 研究データに拒否反応

「講演で一番最初に聞かれるのが『原発再稼働に賛成か、反対か』。この答え次第で、発言の信頼度を上げ下げされる。『再稼働反対』と言わないと聞く耳を持たってくれない人もいる。原発事故後、県内でホールボディカウンター(WBC)による内部被ばく検査の支援などを続けてきた東大大学院物理学専攻教授の

被ばくの値は低い」と説明しているが、数値が低いと

姿勢が結び付けられていると感じている。

NPO法人主催の研究会で早野の講演を聴き、「放射線に空間線量から推計する国の

間いることを前提に空間線量から推計する国の

野らの見解を批判する「公的機関の見解が複数見つかる

野らの見解を批判する「公的機関の見解が複数見つかる

をを進めるべき」と思った。

数値が小さくなり、日々の生活が同じ世帯の中で

「安全」という言葉の信頼をも奪った。(文中敬称略)



個人線量の管理に使われる新型の線量計。時間ごとの線量も表示され、生活実態に応じた被ばく量の把握が可能とされる

再生医療 病気やけがで失われた身体の組織や器官を、細胞や組織の移植、再生を促す物質の投与などで取り戻す医療技術。患者本人の細胞から作った組織や臓器

時事  
解説

たいと思  
の通信欄  
葉であり  
い気持ち  
ってほし  
体に魅力  
つながら  
はもちろ  
業をして  
り楽しい  
っている  
っかりと  
たい。▲

と勘繰ってしまう。「政府は線量管理を空間線量による推計から個人線量に変えることで、住民を分断しようとしているのでは」

原発事故は安全神話の崩壊とともに、「安全」という言葉の信頼をも奪った。(文中敬称略)